
ぶっ壊れた人

明日天気になあれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぶっ壊れた人

【Nコード】

N3277Z

【作者名】

明日天気になあれ

【あらすじ】

彼に感情はない、悪意も善意もなく、彼には純粹な思考しかない。彼にあるのは一つの想い「人を救う」そのひとつだけで彼は生きていく。彼の前では全てが等感覚、「どうでもいいこと」なのだ。それでも彼は人を救う。等感覚なれども人を救う、なぜ？それは自分のため、「泣く顔が迷惑だから」「泣く声が耳障りだから」、辛辣だけど、それは彼の裏返し。彼の「救う」方法は「手を差し出す」だけ、だから人々の求めるような感動の物語なんてありません。彼が手を差し出し、人がその手を「勝手に取る」それだけで物語は進

みます。『ぶっ壊れた人』再び始めます。

プロローグだよっ

薬の臭い、それだけでここはどこかの医療に関係のある場所だと理解できる。

そのために、一人の少年の横に点滴が置いてあり、透明の袋からはポタポタと水滴が落ちてるのが見えた。

少年。

彼の名前は『リウドウ流導 正義』。

12歳、通常ならば小学校六年で誕生日を迎えていただろう年齢だった。

そう、だったのだ。

通常ではない、彼は今、とある研究機関にいた。それは正常ではなく異常。

政府で認知されてるのではなく、見てみぬフリをされている場所。合法という皮を被った非合法、例えるならそう言えるだろう。

6歳のころ、この研究所に『売り飛ばされ』、そこから始まったのは6歳に本当にするのかどうか、誰もが目に疑う用な人体実験。
それもこれも、彼の異常性アブノーマルからくるものだった。

『ジ・レヴオルーション
進化』

その力は、異常性でさえも『自らの力』とし、そこから『他の力でさえも進化させる』。

つまり、ひとつひとつの力を孤立させるのではなく、協調させ、さ

らに力を強めていく。
そういつて異常な才能^{アブノーマル}。

それを彼は持っていた。
故に両親から怖がられ
故に彼は、売り飛ばされた。

彼はもとより心優しき少年だった。
ちゃんとした意識ができあがったときから、ちゃんと心優しく。幼
い児童だからこそできるような、生き物に対する行動、言わば、足
をちぎったり、蟻の巣を水没させたりすることはなかった。
ちゃんと心優しく、笑顔がかわいい少年、^{アブノーマル}だけど…異常。
肉体は、まだ片方の手で数えられるほどの歳で、オリンピック選手
を軽く超えるほどの肉体を持っている。
それは、周りから恐怖されるには十分だった。

だから、売り飛ばされた。

自分をまるで人間と思わない視線に少年は恐ろしく思った。
だが、少年はとある一言で怖がりながらも一歩を踏み出した。
奈落の底へと、自分自身であるきだした。

『これでたくさんの人が救える』

完璧な人間を作る、そういつて名目。

『とある出来事』があつたせいで、彼は心優しさと共に、人を救うといつた目標を持つていた。

幼い心と、そしてその目標と優しさ。

どんなことになるかなんてわかつてさえいない。

故に、こうなつた。

ポタポタと落ちる水滴。

点滴の道具。

針が突き刺さる少年をみる。

真っ白な髪。

そして光を映し出さない瞳。

そして彼の周りには、大量の死体があつた。

その死体には、自らが斬つた以外の傷しかないものと、なにも傷がないものしかなかった。

それだけでも異常
アブノーマル

そして彼の周りの死体は、二通りの死に方があった。

1つ目は、泡を吹いて目を白目にして死んでいる。
ショック死、彼らに何があつたかなんて知らない。

2つ目は、…自殺。

首を吊り死んでいるもの、頸動脈を自分で切って死んでいるもの。

その中で、彼は周りを一瞥したあと、すうすうと規則正しい寝息をたてて、寝始める。

この血生臭さを感じてないのか、それは否。

『彼は、その血生臭さを感じていないのではなく、どうとも思っていないのだ』

何度精神が壊されただろう、何度生死不明の重体になっただろう。

何度拷問のようなものを受けさせられただろう、何度狂いかけただろう。

何度憐れみをもった視線をぶつけさせられただろう、何度叫んだだろう。

何度殴られただろう、何度爪を剥がされただろう、何度骨を折られただろう、何度地面に頭を叩きつけられただろう。

この過負荷が生まれたのは、まだ残っていた人の心によるものだろう。

今はもう、彼に感情とよべる感情はない。

『きつと彼は友情なんかで感情が元にもどるなんてことはない』

『きつと彼は何をされたとしてもなにも感じない』

『きつと彼は　永遠に奪われたままだ』

彼は警察のパトカーの音で目を覚ます。

それでも彼の表情は変わらず、音が止まると寝始める。

ゆっくりと、ゆっくりと彼は寝る。

主人公設定（前書き）

私って ホント馬鹿

編集方法すらわからない

主人公設定

【名前】

流動じゆうどう 正義まねぎ

【性別】

男

【容姿】

真っ白な髪、死んだ目、顔は整っているが、カッコいいわけじゃない、どっちかっていうとかわいいより。それも死んだ目で台無し。

【性格】

昔は優しくかったけれど、今は感情がないせいで空気が読めない、でも周りの人からはやさしいと認知されている。

【異常】

ジ・レヴオルション
『進化』

めだかの、完成とは違うが、凌駕するようではないようなもの。言ってしまうえば無限の可能性をもつ能力。

異常だろつが特別だろつが、それを受け取り、経験値として、蓄積する。

そしてそれは協調性をもち、周りの能力をさらにあげる。
平凡でさえも蓄積していき、感情がないので、優しさ、厳しさは蓄積されない。

【過負荷】

セルフ・ディフェンス
『正当防衛』

自分が受けたものをすべて相手に返す。そこに異常も過負荷も関係

無い。

攻撃は受けるが、自然治癒力さえも進化してきたので骨が折れても一瞬で治る。

ついでに、これは見てみぬふりをした人でさえも巻き込む。

途中参加でも受けてきたものすべてを返す。

まるごと全てを返す。

ショック死、自殺などの状況は、苦痛によるものと、苦痛から逃れる為にやったもの。

【はじまる時の状況】

両親共々首吊り自殺、政府各員ショック死or自殺状態、そのニュースのせいでさっぱりと正義のニュースはまったく起こってないために、世間一般にも知られていない。

警察により救われ、精神崩壊によりカウンセリングを受けるが、すべての医師が無理と断定してしまった。

めだか達とは幼なじみ、善吉とめだかのあったあのシーンでいっしょに会って、善吉の言葉に感動して、めだかに「お前が幸せにするんだったら、俺は人を救うよ！」と宣言して、そのまま幼稚園などでもいっしょになって遊んだ。

親友と呼べる仲なのだが、主人公は記憶を失っている。

感情もないため、なにも感じないが、主人公は宣言の記憶をうつすらと残っており、人を救うこと普通とし、感情がないため、感情で動けないために、脳が自らの利益を優先するが、主人公は、自然に理由が完成する。『泣いているのを見てると目障り』『そこにいられると邪魔だから助けた』『自分の利益になるからやった』。

こんなことで主人公は普通死んだ目をしていたりすると、近づかれなくなるが、なぜか愛されている。

「諦めるは利益にならない、やるだけやって利益になればいい。」

「これ以上やっても無意味なのか決めるのは僕の脳。」

「邪魔だから助けた、それだけ。」

「泣いてる顔が目障り、だから助ける。」

そんなことを言っさっくり助ける主人公。

ツンデレっばいけど絶対に違う。そんな主人公。

『名瀬天歌』（前書き）

この物語は、世界一感情崩壊した中学生の、流導正義が、もはや本能の域と化した救済本能と共に戦う（？）愛も正義もない屁理屈だらけの物語である。

『名瀬天歌』

ポツン、という音が、漫画ならでてきそうな状態。周りは騒がしく、ひとりで正義まことぎは本を呼んでいる。

感情がないために、寂しいという感情からの、友達を作らなきゃなどの感情は一切ない。

だからこそ彼はそこにひとりでいた。

いや…理由はそれだけではない。

横にいる少女も理由のひとつだ。

一人にいるのではなく、みんなが遠巻きにみている、そんな状態なのだ。

包帯のようなものを顔に巻いた少女がいた。

さて、今の状況までの道のりを話そう。

無事、研究室から助け出された、…いや、違う。

助け出されたという名目のもと、被害者という自分を作り出した。

正義まことぎは利益を考えた結果、被害者として振る舞うことを決めたのだ。そっちのほうほうが自分に害が及ばないからだ。

その結果、俺は医師の検査を受けて、『感情の欠落』『精神の崩壊』『肉体的虐待』などと色々診断されたりした。

そこでカウンセリングを受けたのだが、すべての医師が匙を投げた。治らないからではない、『異常』を感じさせないのに、『異常』なのだ。

だから何をしていたのかさっぱりわからない。治らないのではない、治せないのだ。

薬物投入などを受けるが、さっぱり変化もない。

故に、医師全員が断念したのだ。

その結果、定期的な検診を義務付けられ、施設に送られた。

普通、元の親に返されたりしないのだろうか？などと思うだろうが、それはない。

たとえ法律がどんな方向にいったとしても、正義は絶対に施設に入れられたらだろつ。

親がもういないのだから。

首吊り、その状態で発見されたらしい。

そういわれても正義は何も感じないし、顔の筋肉に一切の変化もなかったけれど。

そうして必然的に施設へと送られた。

そこでいつの間にかできていた妹と出会ったが、妹は正義まひきをチラッとみただけで顔を伏せた。

誰でも起こりうるであろうこと、親が死んで悲しい、という感情だ。だが正義まひきはそんなことはさっぱり起こっていない。

感情がない上に、記憶さえない、そんな彼に悲しめというのは無理な話。

そもそも、正義まひきがこうなる原因である両親に、正義まひきがたとえ一欠片の感情でさえも残っていたとしても、悲しみなどしないだろう、きっと、心の奥底でざまあみろとも言っているだろう。

さて、そして冒頭に戻る。

戻れば、ポツンと座っている状況と、隣にいる包帯まひき（仮）少女についてだ。

彼女の名前は『名瀬天歌』利益しか考えない脳により、『必要があるかもしれない』ために、正義まひきは、全校生徒を一晩で覚えてきた。

故に、彼女の名前を知っている。

だが、話しかけないし、話しかける理由もないし、話しかけて何か利益がでるとは思っていない。

だから沈黙のままなのだ。

中学生という年齢だからこそ、今ここにいるわけだが、名瀬天歌という存在の異常さと、流導正義という異様さにより、相乗効果を成し、誰もが近づかないのがこの状況だ。

名瀬天歌、という存在は、隣にいる正義の存在として認めてはいるが、完全に無視を決め込み。
流導正義は、隣にいる名瀬天歌という存在を認めてなどいないうえに、無視以前にないものとして扱っている。

さて、名瀬天歌という少女と、話すのは一週間も立たない日だった。彼女は、三日と立たずにいじめられ、正義という存在はないものとして扱われる。そんな状態をもって、正義の脳は、横にいる、いじめられている名瀬天歌という存在を邪魔として認定した。
だが、名瀬天歌という存在を消すわけにも行かない、いや、犯罪者として認定されてしまつては不利益を被るために、正義はいじめという存在を排除することを決定し、特定し、そしてそれらすべてを暴き、そして証拠をつくりだし、学校側に提出した。目をつけられては困るために、当然のごとく匿名だが。

当然のごとく、ここまでの証拠というものを突きつけられれば、嫌でも学校側は動かなければならなく。いじめの主犯格は早々に取り押さえられた。

それにより、いじめをされた名瀬天歌という目障りな存在は消えたのだ。

そこに正義感というものはさっぱりなく、正義はただ目障りだからという理由で、良くもわからず本能のままに、良くも悪くも人を救ったのだった。

そして数日がたったある日だ、正義がいつもどおりにひとりぼっちで本を呼んでいると、声を掛けられる。

「おい」

その声は名瀬天歌のものだろう、と思い、当たり障りのない返答をして終わりにするために、振り向く。無視しても後々目を付けられるだけであろうから。

「なに。」

「なんでさー俺を助けたんだ？」

「目障りだから」

正義はおそらく本心を告げた。利益などを考えてう色々嘘八百を

並べ立ててもよかったのだろうが、どうせ見破られるだろうと、本能が告げていたため、指摘されて返答により無駄な酸素を使うのは不利益だと考えたからだ。

するとなぜだか名瀬天歌は笑い始める。

周りの人間がこちらをみるが、すぐに恐怖で視線を外す。

「異常アブノーマルがいるってことはわかってたけどよー、ここまでとは知らなかったぜ」

「そう、それで？」

「いや？、ここまで壊れちゃったものをみるのはさー、初めてなんだよなー。」

「そうか」

話は終わったものとして正義まじつは本へと視線をうつす。

名瀬天歌はそれを見て、面白いものを見つけた、といった目をしていた。

『妹』前編

頬が痩せ細ってきている少女がいた。

名前は、流導志恩^{じゆうどうしおん}。

学校から帰るとき、今日は休みだと知っていたので、遊んでもらおうと走って帰ってきた。

元気良く「たっだいまー！」と言いながらドアを開ける、そのときだった、両親の体が空中に浮いているのをみたのは。

意味がわからず近づいてみると、ひどい臭いがして、顔をしかめるが両親が心配なので、志恩は構わずにそのまま走りよった。

そして両親が死んでいるのをみて、志恩は死体から出てきた汚物が下にあることも構わずに泣き叫び、死体を下ろそうと必死になった。

近所の人々が駆けつけてきては、叫んで志恩を、死体を下ろそうと必死なっている志恩を死体から引き剥がそうと彼女を思い切りつかむ。泣き叫びながら志恩は抵抗したが、大人と子供、すぐに取り押さえられる。

小学校一年生と大人、その差は当然ことだった。

取り押さえられ、尚も泣き叫ぶ少女はやってきた救急車に運び込まれ、そのまま連れていかれる。抵抗も無意味と幼いながら知り、そして、泣き叫び、必死になって動き回った志恩の体は疲れきって、そのまま動くということを止めた。

その後親が死んだことを知り、すでに理解していた志恩はそのまま、その場にいた医師たちが危険視していた精神が不安定になつて暴れ回るといふことはなかった。

それは暴れ回るといふことがなかっただけで、精神は不安定になつていく。突風が吹き荒れれば壊れていく砂場で水の含んでいない砂でできた山のように。

「は、い。」

小さく、ゆっくりと漏らした言葉は、自分の精神を不安定にするために、他のことに気をそげないからだ。

そして、医師たちから放たれた言葉は、そんな志恩の精神を知つてはいないからこそ言えたような言葉だった。

「あなたには、お兄さんがいるの。それでお兄さんは」

医師と警察の方々の説明は、まさに突風だった。ガラガラと崩れる精神の音を聞いたような気が、志恩には感じられた。

違法の研究所で色々なことをされてきていた、その言葉は簡略化され、そして言葉を選んでいた。

小学校一年生、まだ大人とは程遠くても、その言葉の意味はおぼろげながらもわかった。

ひどいことをされていた、それは、なぜ？

そのお兄ちゃんという人が誘拐されたというのに、両親から搜索願を出された気配もなく、そして自分自身もそのことは全く知らない。両親である彼らは、まるでいなかったかのように扱い、そして普通に暮らし、志恩を育てた。

志恩は、頭が整理していくたびに、自分の中が壊れていくのを感じた。

自分の中の両親の笑顔が崩壊し

愛情が崩壊し

日常が崩壊し

両親という存在が崩壊した。

幼いながらもわかった。

『両親は兄が誘拐されたのは認知していた、そのうえでないものとして、私を育てた。』

可能性というものがたくさん頭に浮かび上がり、それは最悪なものばかりだった。

『両親が売ったのではないか』その出てきた答えは、満点の大正解なのだが、それを告げるものはいない。いや、誰もこの幼い少女に告げられない。

だからこそ少女が壊れていった。

良いような解釈をして心をつむぎ、悪い解釈をして心が壊れていった。

それを何度も何度も繰り返していった。両親がいたら、泣き叫びながら真実を聞きたかった。

だから、全てから逃げた。

何も答えを出してくれないからこそ、その狂い続けるサイクルから逃げ出した。

そして何も考えないように、意識を閉じていく。

兄と呼ばれた少年をみたことはある。真っ白な髪で死んだような目をしていた。

そこからどれだけひどいことをされたのか読み取れる。

だからこそ、もうすでにいない両親に問いかけた、それを知って、

あなたたちは平気だったのかと。

そしてすぐに逃避した。どうせなにも返ってこないから。

逃避をし続けていると、ある日視界の中に手が見えた。
職員が心配になってまた来たのではないかと思い、無視をしようと思っただが、なぜか気になったので顔を試してみる。

そこにいたのは、兄だった。

兄はおもむろに口を開けると、一言だけ行った。

「迷惑なんだけど」

そう言った一言の意味がわからなくて、志恩は一瞬思考停止した。

「な…にが…っ」

志恩はすぐに怒りがわいてきて睨みつけるように行った。

だが兄は目が死んだままだ、なにも変化もない。頬の筋肉をピクリとも動かさない。

「何故、そんなことをやっている」

「うるさいっ何もわからないくせに！」

志恩は、兄の言葉に瞬時に爆発し、そして逃げだすように走り出す。自分でやっというてすぐに後悔したが戻ろうとはしなかった。

目につつることのない階段脇で体育座りをして後悔を必死に押さえつけた。

嫌われた、絶対に嫌われた、そう思っていた。

だが、それは、その考えは簡単に打ち消される。

次の日

少年はまた、少女の前にいた。

『妹』後編

「なん、で。」

流導志恩は、差し出された手に茫然としながら彼の顔をみた。兄、名前は正義。いつみても目は死んでいて、それでもその差し出された手は、取ってしまいたくなるような暖かさを感じられた。

「迷惑だから。」

彼の言葉はひどく辛辣だけど、そこには見え隠れする本心が見えて、目は死んでいるのに、その言葉はひどく優しく感じられた。

涙を思わず流しそうになり、顔をうつむかせて、泣いているのをみられないようにする。

声がでそうで、それを必死に抑えて、それでも少年は手をピクリとも動かさず、ずっと手を差出していた。

「ひどいこといったよ…ね。」

「だから」

「なんで、それでも、手を差し出すの？」

「迷惑だから。」

そんなことを聞きたいんじゃない、でもその言葉は心を何故か穏やかにした。その言葉は自分にとって怒るべき言葉なのに、辛辣で、悲しむべき言葉なのに、志恩はその言葉のどこかにあった暖かさを感じていた。

兄である正義を、チラツと志恩はみた、変わらず、目は死んだまま。

その目には

絶望も

悲しみも

恐怖も

写っていない…いや、なにも写っていないのだ。

虚無、感情の一切も感じられない。その目に恐怖し、気持ち悪いと思った。それでも、そんなことになっていても、正義は妹に手を差し出し続けている。

人を最も慰めるのは、自分よりひどい存在がいるということだ。

その慰めは、『あやまち』というものを何度も犯してしまいそうになるだろう。

でも、それでもそれは人にとって元気づけでもある。

それでも、彼は頑張っている。

そう思えるから人はがんばれるのだ。そこには正も負も、どちらの

感情が混じり合っているが、それでも人は前にすすめるのだ。

志恩は、気になった。何故この人は、こんな目になってしまつようなことになつたのに、その原因になつた、親の、そしてこの幸せに暮らしてきた、妹である自分に、何故手を差出しているのか。だから…返答に恐怖しながら、ポツリと声を、かすれてはいるものの、力強く出した。

「憎く…ないの？」

その言葉を発した瞬間に志恩は目をぎゅっとつぶつた。返答に耐えられるように、どんな辛辣でも耐えられるように、だけどその返答はわかりきっていて、それでもその返答に、志恩は啞然とした。

「死んだ人間に憎悪は必要ない。」

どうでもよさそうに言つたその言葉に、志恩は啞然とした。いや、啞然とするしかなかった。い

感情の崩壊、それを今しがた知つた。

そして、それを聞いた瞬間、どうでも良くなつてしまった。

「なんで、憎まない、の？」

「憎むことは、わがままでしかない。」

その言葉に、志恩は意味がわからなかつた。憎むことが、ワガママその意味がまつたく、さっぱりわからなかつた。それでも彼の言葉は、まるで頭を撫でる手のように、暖かく、安心していく。

「わが、まま？」

「憎んでも、何も帰って来ない。」

感情などなく、機械的にしか考えられない。『何も帰って来ない』、マンガでありそんな言葉、そう志恩は思った。何も帰って来ない、『復讐などに意味はない』、感情が無い、もしくは第三者だからこそ言える言葉。それでもそれは人にとつての真理だ。

なにも帰って来ない、故にわがままでしかない。人の心の怒りというものを取って付けて、行動する。人の心は、人の心情は言い訳ではない、そう正義せいぎは言いたいのだ。何かを奪われてもそれが帰ってくるわけじゃない、それを取って付けて怒りで正当化し、そして不利益を被ると知っていても人はナイフを持って復讐へと飛びかかる。それがワガママではなくてなんなのだろうか。それは機械的に考えられるからこそ導きだされた考えだった。

とたんに志恩は、とてつもなく、無意味に感じられた。正義せいぎという兄に対する、両親から来る心、後悔か、劣等感か、恐怖か、そんな分類ではできないような心が、きれいさっぱりに霧散していった。

それでも彼は生きている

そういった、心の中で現れた言葉に、背中を押された気がする。兄あにという存在に、妹いもうとは、元気づけられなどしていない、ただ、兄あにと

いう存在を見せつけられ　そして、妹は自らの心を無意味と知った。

ゆっくりと、話しながらも差し出され続けた手を取り、志恩は立ち上がった。

それを見た瞬間に、体を翻し、正義は去っていった。

「まって！」

そう呼びかけて、彼は止まる、顔はこちらに向けない。

「ありがとう、お兄ちゃん。」

言いたかった言葉を言えて、志恩はほっとした。

そして正義はこちらを見ないで去っていく。

志恩はそれを見ながら　兄の手を握った手を、頬に当てた。

『妹』後編（後書き）

妹がヤンデレ化した気がする。

ついでに平均文字数2000くらいですかね？

感想を求めます…、正直主人公がアレなんでどういつ感じに書けばいいとかアドバイスをくれると。

『横溝桔梗』前編（前書き）

オリキャラを許容できることをいまここで承認しろッ…！ここからはオリキャラの発生ッ…！だからダメなやつはダメ…ッ！

あ、劣等感というものは他者とくらべ劣っていることからくる感情のことを指します。

で、ここでの横溝桔梗の劣等感は、普通の生活と他者から化け物扱いされる生活からの劣等感　ですかね？あれ？日本語難しい。作者の日本語力の無さに全私が泣いた。

わ…わかりにくいなら言ってください…

『横溝桔梗』前編

兄、姉、妹、弟

義理でもなんでもいい

血の繋がりにや友達

これを表すのはなんだろうか。

絆 否。

『劣等感』

それを表すもの、それがつながりというもの。人のつながりというものは、上下関係に包まれている。友情は否定しない。だが友情は何かによって常に否定されている。

『親』の会話、それに続く子供への批判。

それは、友情の否定。

そこから生まれるのは 『劣等感』。馬鹿にされてからわかる、上下関係。誰もつくろうとせずにつくったわけじゃないだろう、いや、つくろうとするものもあるだろうが、ごく少数だ。

理解しないで『友情』『絆』というものを破壊する、それは 知らないからこそ罪だ。

だが、丸眼鏡をかけた、地味な少女がいた。黒い、長い髪をもち、手入れされていることを理解できる美しい髪をもった、目に深く髪をかけ、顔を見せないようにする、地味というものを無理やり自分を当てはめようとしているかのような少女。

『よこみぞききょう
横溝桔梗』

その少女がもっている『劣等感』というものは一味違った。

『アブノーマル
異常』という存在からくる、劣等感だった。

目を瞑れば聞こえてくるようだ。親が親戚が、親類関係者たちがそこそと隠れて、自分のことを『化物』『異常』と話していたことは。

だからこそ、普通に憧れた、彼女は普通を知っていたから。

何も知らない時期が、とてつもないほどに美しいものに感じられた。

彼女が持っている異常アブノーマル

それは、『絶対的解答力』。

それはまさしく推理ものの主人公のように、パズルのピースさえあればパチパチツと瞬時にパズルができあがってしまう。

とある黒髪の少女が、誰も解けなかった数式を解く数力月前に、それらを完全にこの少女をがといていたということは、今では誰も知らない。

『絶対的解答力』は、どんなにうる覚えだと言うのにそれを完全なピースとして使用できる。瞬間記憶能力でもないというのに、彼女ききょう

はその知識を、一瞬にしてかき集め、すべてのうる覚えの抜けたピースを『他の知識』をもって完全にする。それは、『忘れかけていた』というものを無くし、少しみたものなら『何時何時でもほりおこせる』ということなのだ。うる覚えのかき集めの状態で、不安定ながらも『完全な知識をもった天才』と呼べるのが『横溝桔梗』なのだ。

『何故彼女だけが』

『彼女ばかり』

『天才とかふざけないでくれよ』

『ああもうみんなアイツと俺をくらべるな』

『なにあいつ気持ち悪い』

『気持ち悪い、おかしい』

『異常だ、俺がダメなんじゃないんだ。あいつが異常なんだ』

『なんなんだよ、本当に人間なのか？』

『気持ち悪い、死ねよ、なんで生きてるんだよ、あいつがいるから比べられる』

『死ねばいいのに』

『なんで生まれているんだらうアイツ、さっさと死ねばいいのに』

『気持ち悪い、気持ち悪い、近づくな、近づくな』

そういった人々の恐怖や侮蔑、そして人間をみるような目ではない視線を送られて、桔梗は嫌がってでも異常を^{アブノーマル}発揮し、『解答』し、周囲のことを理解していった。

だからこそ、桔梗はゆっくりと狂っていき、脳が狂っていくことを拒否し、それが反発しあい、逃げ出す事になった。

『現実逃避』 故に、彼女は全てから閉鎖的になり、すべての人間の言葉を『拒否』した。

目をつぶり、耳をつぶり、心を閉ざし、すべての扉を閉鎖し、何も認知されないようにし、社会的に認知されず、それこそ全てから透明な存在となっていた。そう、彼女は『透明になる方法』を解答したのだ。

桔梗はそれでよかったと思っているし、後悔もしていない。ただただ、夜、過去を思い出して、涙するだけなのだ。

後悔などしていない、過去を思い出し、よかったな、と思ってはいけるけれど、それは後悔ではない。今以上の結果というものを見出せないから『こうしていればよかった』などと考えられないから。

だから涙を流して、心が締め付けられるようになっても、
彼女は、これ以上の結果を見出せない。

だから『解答』できない。彼女は復帰するということとはできない。

彼女の前に彼がくるまでは。

委員会というものは、クラス全員が入らなければいけないと言うのがよくある決まり事だ。

桔梗がいる学校でも違いはない。

どうにせよ、桔梗はいつもどおりに、誰も入らなかった委員会に入り、そしてそこではそばそとやるのだ。

余ったのは 図書委員、限定された人数は1人以上4人以下とそれのみだった。

そして余ったそこに入り、透明人間のように扱われれば、それで終わり。

だが、次にその場所に手をあげた少年は、少々違っていた。

白い髪、死んだような目、どこからみても異常。

そして次に手を上げたのは、白い包帯のようなものを巻いた少女。

それでもおかしい、というのに、委員会決めた終了したとき、手をあげた二人の内のひとりの、白い髪の少年が近づいてきて、手を差出してきた。

「よろしく、横溝桔梗さん」

「え…?」

思わず、その手をみて呆然とした。そして少年の顔をみる、死んだような目からはなんの意図も掴めなかった。透明人間のようになることに決めてからは、誰にも名前を覚えられなかった桔梗は、その少年が放った言葉だけでも驚いた。そして尚もその少年に差し出され続けている手をハツとしてとって、握ってくれたことに、言いようのない安堵が起こった。

その気持ちに、脳が驚きを起こし停止した。

後悔はなくても未練というものを知った。

少年が、少女にとって『絶対解答』という『アブノーマル』をぶち壊した、『解答不可能な白馬の王子様』となることは、桔梗でさえも知りえなかった。

『横溝桔梗』前編（後書き）

ええっと、この話での劣等感についての説明をちょっと考えると

他の人『なんであいつばっかり』

桔梗『なんでみんな私のことをそんな目でみるの、私は欲しくてこんな力手に入れたわけじゃないのに、普通の生活がほしい、なんでみんなばかり幸せ…』って感じ？

検体名を考えてみよう！

『知識の泉』（横溝桔梗）

…自分に命名するちからはまったくくない。

ついでに正義の妹の志恩はアブノーマル異常ではないです、普通です。

善吉に近いくらいの普通。『お兄ちゃんのために』を原動力とした普通な天才。

だれか異常をアブノーマル考えてくれるとうれしい。

異常：

『絶対的解答力』

『進化』

ネタ切れだーッ

ついでに『透明になる方法』を回答したのに何故正義くんは知ってるのー？という答えはカンタンです。

人が人をいらないものと判断するのは結局のところ感情的な部分で

す。例えば今から学生のひとは他のクラスを、社会人は他の部署の人を考えて下さい。そして名前は知らないけど、顔は知っている人を思い出してください。では、なぜ名前を知らないのでしょうか。一度だけあっただけだから？でも、同じ仕事をするかもしれないといったら名前くらい覚えておきますよね？覚えられない人は怠惰なだけです。…自分がそうですね、まあいいです。で、何故知らないのか？と聞くと、たぶん『必要ないから』『機会がないから』と答える、まあ機会っていうのは関係がほとんどないですから、はっきり言うてしまえば、『必要がないから』というものが深くいけば出てくるでしょう。ではなぜ必要がないと判断したか、『もしかしたらいっしょになるかもしれない』のに。結論はカンタンです。人の覚えるか覚えなにかの判断なんて、『効率』と感情を足し合わせたものなんだと思います。『必要がないかもしれない』のに、『めんどくさい』。それが答え…うーん、説明が苦しいなあ…

次回は他作品とともに三日後を予定

暇だったから高校生編予告

部活の部費が増える、そのことにより利益を見出した正義せいぎは自分の部活のために戦う事を決意した。

その、とある二人でくり付けあい、プールで競い合う協議のことだった。

「桔梗…知っているか」

「え、なに？」

「水には抵抗があるんだ。」

「いや、知ってるけど。」

「つまり 水の上を歩けば抵抗がないんだ。」

「え？え？ま、まさか」

「水上歩行。」

「えええー!?!」

『お前らちゃんと泳げー!』

そんなツツコミが入ったが、正義まひきは全力でプールを駆け抜ける。

そんな物語を予定しようかと、思いもよらぬギャグ発生がします。

『横溝桔梗』後編（前書き）

死んだ目をした少年にしてみれば
世界は『虚無』だった。

無機質な人形が動いている世界にしかみえない。

だがその人形には『物語』がある。

全てが等感覚に『無』

彼に敗北はない、どんなに強い敵を目の当たりにしようとも『進化
する』

だから彼に努力も勝利も友情も

ただ人形がつくりだした『人形劇』だ。

だから彼に少年漫画のような世界は起こらない。

同じように、人の言葉も無意味なのだから。

『幸せ』もない『不幸』もない、反対の意味をもつ言葉というもの
も理解できない。それは覚えるだけの表であり、そこに反対という
存在はない。

全てが無機質な『虚無』

だからこそ、人を救うことには向いているのかもしれない。

『横溝桔梗』後編

ミンミンと蝉が鳴く。それは終わることがないように感じさせるけど、それは一週間の命。

ポツリと落ちてても人の世界観には、どうでもいいものとしかつつらない。

いや、それどころかうるさいと叫ばれることもある。

彼らは、そこにあつたと証明したいだけなのかもしれない。

それを邪魔と叫ぶということは、命を無駄と叫んでいるということ

わかつたかな？

人間こそ残酷なんだ

ただ、人間の言う事全てが残酷なんだ

普通、普通、普通。

それを誰に壊されたかを深く深く詰め続けると、彼女の前には、人間と言う言葉が降り立つ。

だからこそ、すべてから見られないように努力した。

それは逃げているのだ

しかし桔梗にとって、その逃走はもっとも平和的であるものだ。殴られもしないし、罵倒されもしない。

兄が東大に落ちたとき、私が面白そうだからという理由で東大の問題をといたときの用紙をみつきり、片目の視力がほとんどなくなるほどに殴られることもなにもない。

全て『答え』をだしてしまふ、その力を呪ったことはいつでももあった。

だけど逃れられない現実がそこにある。

お前は逃げてるだけだろ？

逃げられない現実を強いているのは、お前が困っている人間でしかない

改心は永遠にない。

後悔なんて一ミリもないから。

でも、未練はあった。

虚無でしかない存在に、どんなに『答え』をだしても無意味だ。
答えは0、永遠に0

その存在に答えはでない。

10を3で割続けるほどに無意味だ。

だが、桔梗ききょうは『知り』たかった。

この存在を。

答えはでてこない。

彼に数字でアンサーをつけるなら

『インフイニティー
無限』と『ゼロ
無』

彼の前では等感覚で0がおし並べられている。

そんな存在に答えをつけるなんて無意味の上に無駄だ。

「つまりよー、アイツを理解しようなんておもわねーほうが身のた
めだぜ？」

「…」

名瀬さんから説明されたのは、彼という存在で、今までに分かった
ことだった。

虚無、虚無、虚無。説明など不必要なくらいに、彼の存在というも
のは何もなかった。

ただ、彼を突き動かすのは『救う』という思い。

どこで手に入れたかも分からない、心の中で杭のごとく突き刺さっている。

彼は、プリントを落としてばら蒔いた人を見つければ、絶対に助ける。

かつあげされている人を見つければ絶対に助ける。借金がある人を見つければ絶対に助ける。

助けるといっても、それは絶対的な意味ではない。

『可能性』を提示するのが『彼』なのだ。

彼自身がわかってやっているかはわからない。

だが彼は『助かりたい』と願うものしか手をださない。

故に彼は、手を伸ばせば取れるところに『救い』を置く。

『助けて』といえはたしかに助ける、それが彼。

「ねえ…名瀬さん。」

「んー？」

「なんで、正義くんは、私に手を差し出したの？」

「…その答えはさー、たぶんでてると思うぜー。」

「…うん。」

小さく返事を、私はした。

心が温かくなった。

そこに善意も悪意もない。

だからこそ、温かくなった。

善意の中の悪意というものを心配せずに、心に受け止めたから。

私は…笑いたいんだ。

彼まなきという存在がいるだけで、心が温かくなる。
裏表のない無が、いるだけで。

マイナス
悪意マインをした少女は善意プラスを信じられないと叫ぶ。
ゼロ
虚無はその少女に手を伸ばす。
少女は 自らを知る。

だから聞く。
少年に

「なんで 私に手をのばすの？」

少年は、「ごまかさない。
そんなことはない」と本心を隠さない。
そのまま答える。

「悲しい顔が、迷惑なんだ。」

少女は優しく笑うんだ。

『横溝桔梗』後編（後書き）

どうもー！hackとISのクロスオーバー書いたり
ギルガメッシュをひぐらしの世界観にぶちこんだり
近未来のやつ想像して書いてみたり…暇人な作者です。

作者が考える過負荷は『世界観の投影』という感じですが、
だから、『正当防衛』という過負荷が現れた。

すべてが等感覚。せ、説明とか無理…なんでしょう…具体的な感覚
はあるのですが、それを答えとだすと無理ですね。桔梗さん！

投稿、ご飯作るので一休み

番外編（前書き）

小学生のころのめだかと善吉の喋り方がわからなかったから
善吉を僕にしようと。

あるえー？善吉が強くなったのって真黒の言葉が原因だったよねえ
？

番外編

黒神めだか、人吉善吉。

流導正義の親友であった人たち。

小学校にあがり、異変に気づいた。

正義が、いない。

転校したなら僕たちについてくるはずだ。おかしい、なにかがおかしい。

善吉もめだかも、両方ともそれには気づいていたようで、そわそわしながら話をする。

「めだかちゃん…僕、正義の家についてくるよ。」

いても経つてもいられなくて、善吉は立ち上がる。それをみて、めだかも共に立ち上がる。

「私もいくぞ、善吉！」

「…うん！」

そうして二人は正義の家に行った。家の前にきて、見回す。

「生活感がある。そして電気のメーターも動いている。引越してはしていない。もしくは冷蔵庫くらいの、起動を続けなければいけない家具があるということは断定した。その上で部屋の前の表札は流導から変更はない、新聞が大量にはさまっているようではない

し、家の前の植物は定期的に水をやっていようだ。引越しは絶対
にない。遠出というケースも可能性が低い。」

めだかの推理を、黙って聞いている善吉、小学校一年生の上
りたての少年に、理解しろというのが不可能な話だ。

理解できない自身が言っても意味はないと分かっているから善吉は
黙っていた。

めだかはゆっくりとインターフォンを鳴らす。

ピンポンツという機械的な音が流れ、数秒経った後に声の流れ出
す。

『はい？』

それは軽い声だった。正義まことの母親の声。善吉はコクリと頷くと、
めだかも頷き返す。

「正義まことさんの友達ですが。」

『っ』

善吉がそうだった瞬間に、インターフォンから息を飲むような音が
聞こえて、めだかは怪訝な顔をする。

善吉もかすかではあるが、おかしいことを感じていた。

『正義まことは死にました…』

「え!？」

「嘘だ。」

「ええっ!?!」

『ッ!?!』

善吉は、正義まひさの母親に驚いたあと、めだかの即答に驚く。

正義まひさの母親が、インターフォン越しで息を飲んだことがわかった。

『本当よ?正義まひさは死んだの、死んだのよ?わかるわよね?』

善吉が聞いてもわかった、『こいつは焦っている』と。

めだかは表情を変えず いや、さらに視線を冷たくして、言い放つ。

「では、『葬式はいつですか?』」

『葬式?葬式ね、もうやっちゃたのよ、ごめんなさいね、もう

』

「…それじゃあ線香をあげたいのですが 『家であげていただけませんか?』」

その瞬間、善吉は理解した。『正義まひさの母親は敗北した』と
そもそもの理由こそ、それこそ

ボロボロの布切れのようなもので纏った嘘だった。

その上で最初の『嘘だ』の発言であせらせた上で追求して、ボロを
ださせた。

そう、『まんまと手のひらで躍らせた』のだ。

最初の一投で、『理由をつけて逃げていれば』もう追い詰められる

そういつて善吉は無理矢理にも手を引いて逃げ出した。
めだかは、ずっと正義まひきの家をにらみ続けていた。

その後、この家は引越しになり、調べたくても調べられなくな
ってしなつた。

公園で、ハアハアと息が荒いのを整える。
めだかは茫然としながら、立っていた。

…ホロリと涙を流す。
めだかの涙を善吉が気づいた。

「泣かないでよ、めだかちゃん。」

自分も、涙をおさえきれなくなってしまう、そう善吉は心の中でポ
ツリとつぶやく。
だけど、めだかは止められなかった。

「う…うわああああん、うわああああん。」

「お願い…だから、ぐすつ、なか…ひつくないですよ…っ」

善吉は、正義まひきとの約束があった。

その約束をもつてしても、耐えきれないほどに、悲しかった。
止まらない、涙。

とある公園に、二人の少年と少女の泣き声が響きわたった。

『なあ善吉、男が泣くなよ。』

『でも、かなしいんだよ…』

『そりゃーわかる、悲しくて泣いちゃったら、みんな悲しくなるだろ？』

『そう、だけど…』

『男が泣いていいのはな、大切なものと愛する者を助けられたときと、大切なものを助けるくらい、つよくなれたと自信をもっていえるようになったらなんだよ、だから泣くな、善吉、約束だ。』

『やくそく？』

『ああっ！俺とお前の、男同士の約束だッ』

『…うんっ』

番外編（後書き）

原作の流れや過去についての会話などが流れれば、それを参考にしているいろと変えたいなあ…

正直母親の怒り狂うシーン、ヒステリックシーンが妙におかしいしね。

調子に乗って大量に作った、食えぬ

『香月四季』前編（前書き）

感想でアイディア、そしてネタなどをくれたひと、ありがとうございました。
いました！早速 次回の人に使いました。

もともとこんな物語はできていたりしましたが フフフ…二
つ名メーカーで『ダイクヒーロー暗黒英雄』や『ヒーローキラ英雄殺し』ってでてこないんだよ
ね…

一人称が今までさっぱりなかったせいか、少々文章が荒れている気
がするのは私だけでしょうか？アドバイスを求めます！お願いしま
す！
今回は前中後とわかれています。

『香月四季』前編

教室の隅っこに、少年がいた。

影が薄く、平凡　そう、どこにでもいそうな少年。

『草食系』『もやしっ子』

説明を求めれば簡潔的に言えばこう

言えるだろう。

そんなどこにでもいる少年が

48人を病院送りにした者だとは、誰も予想できなかった。

ヒーローショー、日曜の朝にやる『戦隊もの』というものがある。

それをみて正義の味方というものに憧れたのは少なくはないだろう。

『かつきしき香月四季』という少年もその一人だった。

だが、それは他とは違い、『正義が悪に勝つのはあたりまえ』
という常識を容認できなかったのだが。

『なぜ、英雄ヒーローが悪に絶対に勝たなければいけないの？』

そう大人に聞けば、困ったように頭を掻いてごまかすばかりだった。悪者にだって、努力という物語があり

悪者にだって、家族という絆があり

悪者にだって、生きようという努力があったのだ

だけど、それを全てどうでもいいように語られるのが『正義は勝つ』

その一言だった。

悪者に対し、その言葉は『悪には権利もなく、殺されても文句もいえない』そういう意味のように感じていた。

それは横暴でしかない、警察が悪者に対し、『悪だったから殺す』

といって銃を眉間に押し付け、引き金を引く。その動作が『正義

は勝つ』、香月かつき四季しきにはそう感じられてならなかった。

そして、この『普通ノーマル』であった少年が『異常アブノーマル』を理解した。

『ヒーローごっこ』それは正義と悪に分けて遊ぶ『ごっこ遊び』というものだ。

ヒョロヒョロとした外見のとおり、いじめられっ子であった香月かつき四季しきは、いつも悪人だった。

殴られ、蹴られ、いたがりながらも、ごっこ遊びだし『正義は勝つ』のが当然なんだし、と必死になってガマンしてきた。

この日も、悪人になり、正義の英雄ヒーローが殴る蹴るをしてくる。

痛い、痛い。でも、アイツは今正義なんだから、しかたない

そう思いながら必死に耐えてきた。

体がグラついて、倒れ込む。

英雄はジャングルジムの上にあった。必殺技の準備でもしているのだろう。

そして

その時 この『許容するために言い聞かせてきた』『言葉』が崩壊した。

『正義なんだから』その言葉がバキンッと破壊された。

英雄にあつたのは、下賤な笑み。

『優越感』それがそこにあつた。

『正義は勝つ』？ならばあいつは正義なのか？
僕が倒れて、それをみて優越感に浸っているあいつが
おかしいだろ、おかしい、おかしいおかしいおかしいおか
しいおかしいおかしいおかしいッ！
殴るのを嬉しそうにする英雄ヒーローがいていいものだろうか？いいや、違
う。

間違っている。

この英雄ヒーローは 間違っている。

多くの人々に認められた英雄ヒーロー、その存在のおかしさに『香月四季かつきしき』
は理解した。
正義の心をもった本当の英雄ヒーローと偽りの英雄ヒーローを『香月四季かつきしき』は理解し
た。

その瞬間、必殺技のためをしていた少年が吹き飛んだ。
そして、悪者であった少年の手には 『まるで無理やり引っこ抜
かれたかのようなジャングルジム』があった。

冷たい目をして英雄ヒーローであった少年をみる。
その周りを取り囲む少年たちをみる。

「痛かったんだよ、痛かったんだ、うん、とおっても痛かったんだ。
ねえ、みんな、優越感にひたって英雄ヒーローをやる人って、英雄ヒーローなのかな
？違うよね？」

ニヤリと、冷たい笑みを浮かべる。

「でも、それでもそれを英雄ヒーローって呼ぶなら僕は」

「ダークヒーロー暗黒英雄だ。」

『香月四季』前編（後書き）

【香月四季】かづき しき

性別：男性

検体名：『ダイクヒーロー暗黒英雄』

目の前のものの物質をどうにでもできる能力。
ただし触れられるものだけ。
掌握する圏内は空気はあまり大きくはない、力に関しては感情によ
つて暴走する兆しあり

『香月四季』後編（前書き）

今更気づいたんですが。

前中後にわかるなんて言っておきながらまったく分けられてませんよな。

『香月四季』後編

正義と悪

そんな簡単に割り振られる

人は悪を侮蔑し蔑む

…自分を正義だとても勘違いしているのだろうか

そういえば、人はたいていこう答える

『自分にも悪いところがある』

それがひどく不快で仕方がない

正義と悪という立場の中なら、正義という立場にいるであろう自身でさえも悪という場所があるというのに、悪という立場にある人を悪だと決めつけるのに

悪を悪とだけみる、その視線に、人という内側を視ずに蔑むその視線に

人は、ひどく自分を正しく見せたがる

…人は、ひどく正しくない

正義

その言葉を考えれば彼は理解できない。

傲慢な正義を裁く、などという言葉をつくが、それが傲慢だと、理解していた。

だからこそ、やめようと思ったこともある

しかし、それは四季しきにとって無理難題といえることだった。傲慢な正義を嫌悪するということは、傲慢な正義が嫌でも目についてしまう。

PTAの子供、家で優等生としてふるまう…そんな子供が人をいじめ、そして最後のセリフはこれだった。「俺とお前、どちらを信じると思う？」答えは容易だった、立場的にも強い、優等生として名が知れているその子供のことを信じるだろう。

だったらそのいじめられている子供は誰が救うんだ？

傲慢かもしれない、だけど誰が救うんだろうか

誰の味方もいない、ちっぽけな存在に

終わった後に大人たちに言われた言葉がある

なぜこんなことをやったんだ？やりすぎだ

大人を頼ればよかったのに

大人ならちゃんと解決できたのに

改心などありえない。

…そんな言葉を吐く大人を誰がしんじられるというのだろうか
誰も気づきさえもしなかったというのに

夕焼けの空、幻想的な世界を教室内で作り出されていた。
そこにいるのはひよろひよるとした少年だった。

ただ見出したかった
見つけた真つ白な少年に、
平然と人を助ける少年に
転んだ人がいれば、手当をする
物を落とせば拾ってくれる

そんな当たり前のことだが、やれる人はいない、そんな少年のことを
褒められている時に目をみればたいていのことはわかる
『悦楽』 『快樂』 『蔑み』 多種多様な感情があり、それを感じ取れる

だが彼は虚無^{ゼロ}だった。

何にも感じられない、それどころか何も理解できない

顔を上げれば目の前に彼がいる、『^{じょうどうせいぎ}流導正義』
その存在をみて、からっぽだと表現してが、間違いだと香月^{かづき}四季^{しき}は
理解した。

何も無い、虚無^{ゼロ}だった。

震える声で問う

「お前は、なんで人を助けるんだ？正義の心をもってとか、そういうことを考えているのか？」

「無意味」

…言葉の理解ができなかった。

それを相手は理解したのだろう、再度：正義は口を開く。

「正義、悪、それは無意味。人はそんなものを考えて行動しない、自分の信念から起こり、そして行動する、それだけ。」

「…ッ」

善意も、悪意も、無い。

正義も悪にも染まらない答えがそこにあった。

短い言葉

平坦な口調

だからこそ、香月四季は知った。

自分の信じていたものがそこにあった。

正義という言葉にとらわれず、悪だということにもとらわれず。ただ自分の信じたことを貫き通すという強いものがそこにあった。

ポタポタと頬を流れる涙を感じ取る
自然に流した涙だった。

「帰っても」

虚無少年なにもないにとってはいる必要がないから帰っていいかという言葉だ
ったのだろう

だがそれが彼しみにとっては優しさのように感じられる

「ああっ…！」

涙が止まらない、前をみればすでに正義まひきはいない。
だからこそ、何もかも開放する。

「うあっえぐっうわああああああっ」

正義ただしいことなんだと言い聞かせて保ってきた少年は虚無せむに出会っ
た。

ただ少年は理解した
正義ただしいことじゃなくても悪わるいことじゃなくても
そこに信念があれば、よかったことを

何分たっただろうか
いや、何十分かもしれない
何時間かもしれない

時計をみれば10分程度しかたっていないことに苦笑をする。
涙はもう流れない
残った涙を拭い去った少年の顔はすがすがしいものだった。

自然と笑顔になる
体が軽い

「行く…か」

自分の道を、少年は歩き出した。

『香月四季』後編（後書き）

言いたかったのは

正義を裁くことを傲慢だと思って苦しんでいる少年に
そこに正義も悪もなく、信念をもって進めば、そういった傲慢だと
かは関係ないんだってことをいいたいただけなんですよね。

で、次の異常アブノーマルですが、過負荷になります。

閑話（志恩のヤンデレ化Lv1な話）（前書き）

ただのおふざけです。

「ねえねえヤンデレの書き方を教えてよ」

「依存したものにたいする外人が『It's so crazy!』
って叫んじゃう感じで書けよ」

「…なんで外人？」

こんな会話からおかしいかんじをだせと言われても…ヤンデレの書き方がわからない。

それにしても今週のジャンプをみると球磨川かつこいい。
なにこれかつこいい。

球磨川敗北

球磨川『やれやれ見破られちゃったなーもー』

そんなとき善吉登場。

善吉「だったら俺がやるぜ！」

球磨川『僕の代わりに裸エプロンに
みたいな会話がされると思ってた。

「断るっ！」ちえっ
』

閑話（志恩のヤンデレ化Lv1な話）

風が、舞う。

春の息吹が再びやってくるのを感じる。

孤児院の中で、その兄妹はサクラの中佇んでいた。

妹の髪色が普通の色だというのに、兄の髪色は真っ白で、恐ろしいくらいに浮いている。

瞳は暗く、そして何も無い。

暗闇すら無い、光すら無い、何を映し出しているのかさっぱりわからない。

視ればまるで宇宙に吸い込まれるような、そんな瞳をもつ少年と、笑顔でその兄である少年の手を握っている妹。

たいていの人々は、少年をみれば恐怖を感じた。

知らない場所の恐怖、わからない場所の恐怖、おそらくそれと同じものだろう。

わからないのだ、目の前にいる少年のことが。

だがそんな人々も、たいていの人々が最終的に普通に接している。

何故か、それはわからないけれど、わかるからだった。

この少年について、誰もが理解できない、何も無い場所に何かがあることを前提に理解しようとしても何も理解できないのと同じだ。

ないのに理解しようとする、そして結局は理解できない。ただ、彼をみていた、ただ一つわかった。

この子は、悪い子じゃないということだった。

何も無いというのに、よい子悪い子というものはない、だが、正義

と接すれば、何故かこころの圧迫が無くなっていく。
もっていた警戒が切れるのだ。

そして理解するのだ。

そもそも横にいる妹こそ危険なのだ（女性にとって

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん」

「…？」

「大好き」

「そうだな。」

よくもわからず、この場は少しぐらい返したほうがいいと脳が判断し、小さく返す。

人間関係の円滑な進め方というのは、少しの信念とちゃんとした返答だ、人に返そうとしている信念を感じさせ、なおかつちゃんと返す、それを完璧にしようと思った結果、こういう返答がなされた。

普通ならほのぼのとした光景だ。

だが後ろの孤児院で、職場の大人の人々やませた子供、そして中学生高校生といった面々は顔を引きつっていた。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん」

「…?」

「大好き」

「そうだな。」

…そう、なんとこの会話が続けられたかわからない。

朝から 今はずいぶん夕方だ。

さすがに入らないか、と提案するともものすごい形相で妹妹がにらんでくるので手が出しにくいのだ。

そもそもこの光景が『珍しくない』こと自体おかしいのだ。

兄妹が、別に妹に好感があるか、と考えれば、何も映し出さない瞳をみても好感をもっているとは思えない。

そして日常をみると、アブノーマル異常だ。

そもそも職員がやることを考えてみると、おかしい、彼らがやることは

週に一度『盗撮道具』やら『盗聴用マイク』などを兄妹の部屋から探し出すことになっている。

犯人は わかりきっている、が…完璧に証拠を残さない。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん」

「…？」

「大好き」

「そうだな。」

回数がさらに追加された行為をみて、職員たちはため息をつく。

この兄妹はおかしい、兄も妹もおかしい

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん」

「…？」

「大好き」

「そうだな。」

どうすればいいんだ…

そう職員はため息をつくしかなかった。

「そういえばお兄ちゃん、新しく知り合いが増えたらしいね？女？」

「…そうだな。」

「また増えたの…お名前は？」

「古賀こがいたみ」

「…脅迫しようかくいさせてね」

「…？ああ」

閑話（志恩のヤンデレ化Lv1な話）（後書き）

さらなる番外編。

もう書き方とかどうでもいいやといった感じで話を創ってみる。

「…」

香月四季、彼は迷っていた。

見ているのは自分の貧相な肉体、もやしだ、ああもやしだ。

暗黒英雄などという名前が誰につけられたかもわからないがついて
いる。

なのに肉体が貧相なのはどうな

のだろうか

そう思って、相談のために流導正義（りゅうどうせいぎ）にあってみる。

理由は率直にいつてくれるからだ

「どうしたほうがいいと思う？」

「鍛えれば」

「わかった！」

- e n d

高校になったらアンノウンもちのあの生徒会長並みの筋肉マッチョ
になっている伏線。

いらない気がする。

『月下綾芽』前篇（前書き）

中学時代最後の話

名前は月下綾芽

これが終わったら、人物紹介とともに本編突入。

この手の話を書くとき恐ろしく嫌になってきますねーアッハッハWW

『月下綾芽』前篇

暗い暗い世界に、鈍い音が鳴り響く

その音はなんだろうか、聞いてみれば、それは殴る音だった。

永遠に流れるかのように、止まらないその音は、殴り続ける女性の
嗚咽と、殴られる少女の涙とともに繰り返される。

少女は、女性の いわば強姦、無理やりに汚され、生まされたもの
のだった。

女性は一人の命を捨てる罪悪感にのまれ、自ら産むことを決意する。

それは、感動の物語かもしれない

経緯はどうあれ、がんばって立っていきこうと女性が立ち上がったのだ
産まれた少女は、愛しいと感じられたのだ

だが、それは何もわかっていな人々からの言葉だ。

女性はボロボロになるしかなかった、親からの絶縁、そして子育て、

人々の悪意のまなざし、自身が悪いんじゃない、ただただ叫びたくても叫んだら自分が悪者にされるであろうまなざしに、女性はただ耐え続け 壊れた。

スイッチがはいったのはいつだろう

少女が幼稚園へと入り、酒に酔いながらも、辛い辛い時間を忘れようとしていた。

辛くて辛くて我慢して我慢して、罅が入っていたのかもしれない。少女の髪の色が見える、

自分と同じ髪色ではなかった

壊れかけていた女性は、そこで 壊れた。

何もかもがガラガラと崩れていく、恐怖、憎しみ、怒り、グツグツと煮えたぎりながらも、吹き零れなかったその鍋は、押しとどめようとしていた理性の蓋を押し分け、噴き出した。

叫び声が起こる

それは恐怖の叫び声、フラッシュバック、強烈なストレスにより脳に刻まれた過去が、再度鮮明に浮かび上がってくる現象。

そう、過去の、それにより思い出された記憶が誰もが予想できるところだろう。

倒さなければ、殺さなければ、そんな恐怖をもって、立ち上がる。

少女は何も知らずに、やつれながらも近づいてくる優しい母を見て笑った。

そして殴られた

何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も

痛い、怖い、どうして、どうしちゃったのお母さん、そんな思考が何度も浮かび上がる、だが少女はどうしても目の前にいる殴る女性、自分の母を憎むことはできなかった

痛い、でも、それでもそんなにおびえた母をみた少女はただただ罪悪感を感じる。

何故？私が悪いの？

何故？ああ、私が悪いのか

何故？私がお母さんをしたのだから

何故？優しいお母さんが理由もなしにそんなことをするわけがない

何故？でも、理由がわからない

何故？…ああそうか…私がいるのが悪いのか

罪悪感、自分に対する罪悪感、それは全くの無実だというのに、それを少女は抱え上げる。

だからお母さんは悪くない、それは愛ゆえの行動だった。

だけど怖かった、目の前の自分を殴り続ける存在が

それも罪だと少女は勘違いをする、そう勘違いだ。

だがそれは幼い少女は気づかない、自分が悪くないとも考えない。

自分が悪いというのに、自分が殴られているのに怖いと感じる、それはおかしいと考える。

だから少女はカチリと何かスイッチがはいつたのを感じた。

何も怖くはない

目の前の殴られているという事実を感じた。
母親の、うつすらと見えていた罪悪感を消し去る、少女は自分が悪いと勘違いしているからこそその行動
過激になっていくその行動

ごめんなさい、お母さん

笑顔でそう答えればピタリと拳が止まった。
そして目の前の光景に啞然とする。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい
そう自分の子である少女が、血を流しながら謝り続ける、そして自分の拳には血がついている。
少女は目をつぶる、疲れ切ったような顔で、クタツと倒れこむ
それが死んだようで、一層怖さを感じる。

少女が気絶したことで、少女が発言した異常が途切れた。
そして母親である彼女は、自らが感じていた罪悪感をすべて受け取った。

「あ……」

声にできない叫び、一瞬のことでもなにかもが真っ白になった。

「うわあああああつああああああ」

母親は叫び続け 次の朝、少女はひとりぼっちになっていた。起き上がった少女は、いない母親を探し回り、そしてまたも勘違いするのだ。

私のせいでお母さんはなくなったんだ

そう思い込み、ただただ償わねばと、少女は壊れていった。

赤茶の毛をした少女が、いた。

ショートカットで、見た目は活発な少女、陸上部所属で成績も優秀。だがそれは償いだった、自分がしたことを誰に償っていいかわからなかったから、とにかく努力した結果だった。

少女は自分の異常にも気づいていた、常に最悪の結果をもたらす感情を『貯蓄する』能力だと、少女は数年で気づいていた。貯蓄し、そしてため続けたものを返し、人を壊す。だからこそ、自分の罪を償わねばと必死になっていく。

『つぎしたあやめ
月下綾芽』

ただ少女は人を狂わせる自分を償おうとして、そして人の眼にとま
り、そしてさらに罪を増やしていると考え壊れていく。
だが心動綾芽^{しんどうあやめ}は目の前の存在に呆然とする。

心がない

その目にはなにもうつしださず、狂わせる最悪のものが何一つない
最悪がそれだと言わんばかりに、その存在はあった。

「…よろしく。」

中学三年、普通の中学生なら受験を考える年だろうか
そんなことを考えられなくなるほどの存在と、彼女^{あやめ}は出会った。

『月下綾芽』前篇（後書き）

【月下綾芽】

性別：女

検体名：ブラッディネオテニ禁色幽閉

最悪の結果を残す感情を蓄積させ、途中で返すことによりさらに最悪の結果を作り出す。

たとえば、『自殺したい』といったもの、やっぱり死が怖いから耐えられるけど、それをさらに超える欲望を解放させれば結果的に相手は自殺する。

ついでに検体名は綾芽という文字だけ絶対のこして、ひたすらに思いついた文字を入れてたらこんなものができた。

禁色幽閉…なんかあってるなあなんて思ったんだけど…いいかなこれ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3277z/>

ぶっ壊れた人

2011年12月11日13時45分発行